讃歌

中上健次

讃歌

中上健次

文藝春秋

著者略歴

一九四六年、和歌山に生まれる。一九六五年、新宮高校卒業後、上京し、羽田空港事業株式会社などの勤務を経て、文筆生活に入る。一九七六年、『岬』で第七十四回芥川賞を受賞。一九七八年、『枯木灘』にて芸術選奨新人賞を受ける。作品集『岬』『十九歳の地図』『枯木灘』『鳳仙花』『千年の愉楽』『地の果て 至上の時』『日輪の翼』『野生の火炎樹』『奇蹟』など、著書多数。

讃歌（さんか）

一九九〇年五月一日 第一刷
一九九〇年七月五日 第六刷

（定価はカバーに表示してあります）

著者 中上健次
発行者 豊田健次
発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表（〇三）二六五―一二一一
印刷所 大日本印刷
製本所 加藤製本

万一、落丁乱丁のある場合はお取替致します

© Nakagami Kenji 1990 Printed in Japan ISBN4-16-311780-6

讚歌

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

一

風が公園の樹という樹を揺する。その風にひきちぎれた小枝が、広告チラシと共に空に舞い上がっていた。風は公園の周囲に林立するビルに当たり、折れ曲がり、出口を求めて上に吹き上がる。梢も広告チラシも一対になって、さながら波に巻き込まれた舟のように上空でクルクルと舞い勢いよく上昇し、次に急降下する。

体が冷え上がった。しかし彼は身動きせず立ったまま見ていた。絹のジャケットに白のリネンの混った一目でホストと分かる服を着ている。肌に風が当たり、何人もの女らがそうしたように、いや何人かの男もそうしたように生肌の一つ一つを風に触られ、毛穴の一つ一つを濡らされ、くすぐられる。風は彼の体の熱がこの上なく有り難い事のように体温を奪おうとする。

何も考えなかった。〈白豚〉や〈黒豚〉がそうしたかったらすればよいと、ただジムナジウムで週三回、三時間ずつかけて鍛えた体を与えるように、風に吹かれて、何も考えないまま彼はただ波のように生起する快楽だけを追っている。体が冷え切り、ただひとつの財産の体が風邪を引き発熱するという思いがよぎるが、その思いすらサイボーグのように生きていこうとする彼自身を裏切る余計な考えとして邪魔になる。

風は彼にまといついた。週一回、ジムの帰りにパーラーに立ち寄って手入れする長めの嵩の多い髪を、さながら髪フェチシズムの〈黒豚〉が唇と手の愛撫で足らずクリトリスのような短い性器をこすりつけ、射精しかかり彼が殴り倒した時のように、風が執拗にいじくり廻し、このままでは到底、店に出られない、店に出る前にサウナに寄るかパーラーに寄るかしなければ駄目だと思うほど乱されてしまっている。

〈白豚〉は事が終っても一刻も離れたくないというように、シャワーを浴びている彼の姿を見続け、そのうち眼が輝き出し、彼の足元にひざまずき、髪を濡らし胸を流れ性器からほとばしるような熱いシャワーを口で受け飲み干す。彼は〈白豚〉を止めなかった。熱いシャワーの快楽に耽る事以外、余計な事だと思い、シャンプーを使いリンスを使い、そのまま外に出た。

吹き続ける風を受けて、細かいオリーブ状の葉のついた小枝と広告チラシがビルよりも高く舞い上がるのを確かめてから、公園の入口まで歩き、公衆電話の受話器を取った。諳じている番号を廻し、三回コールをして切り、また同じ番号を掛ける。いつまで待っても応答する声はなかった。ふっと記憶が甦り、この一年サイボーグとして自分を変えた努力が台なしになると思い、空高く舞い上がった小枝と広告チラシをさがす。もうそれらはどこにもなかった。彼は口笛を吹き、呼び出し続ける電話をそのままにして歩き出した。耳元で電話の呼び出し音が響いていた。

道路をまたぐ歩道橋を渡ってビルの中に入り、ビルの地下をつないだ道を通って隣のビルの二階のジムナジウムに入って腕と胸の筋肉を鍛える機械に挑戦し、ひと汗かいてからシャワーを浴び、専用のロッカーからドライヤーを取り出して髪を乾かし、ローションを塗り、鏡に向かってホスト用の笑を浮かべてみた。「男前になったぞ」とつぶやき、ふとその言い方が一年前まで一緒にクルーを組んでトレーラーを走らせていた相棒の言い種だったのに気づき、彼はニヤリと笑う。

話の筋はこうだった。二人で組んでトレーラーを運送会社から持ち出し、働いていて、ついにトレーラーが盗品だと発覚するや、早々に二束三文で売り払って逃げ出した。しばらく安ホテルを転々としていたが、金がなくなり、それでスポーツ新聞の広告欄にあったホストクラブにホストの面接に出かけた。面接した店のマスターと称する男は一も二もなく二人を雇ったが、「いい男ねェ、あっちの方も強いんでしょう」と科を作って言う言い方が気になり、念の為にと彼が「女、一日何回ぐらい相手にしたらええんじゃろか？」と訊いてみた。

「さあ、ねェ」マスターは鼻白んだように言い、あきらかに本気で数えていない態度で首を傾げ、一二、三、と声に出して指を折り「ええんじゃろか、というほどいないわよ」と口をとがらし不満げな表情をつくる。薄っぺらな芝居じみたその言い方に相棒が「こりゃあかんど」と怒り出す。「あかんど、という事ないんど」マスターは相棒の言葉を真似て言い、何を思ったのか「お互い様じゃないですかァ」と居直った言い方をし、嘘をついてもその道のプロにはすべて見通しになるのだと言うように「いいじゃないの、二人、恋人同士なんでしょ。こちらもそれ、知ってて、普段ならカップルは断るんだけど、二人共あんまりいい男だから、黙って二人共入れてあげようと言うのだから」

彼と相棒は顔を見合わせ、苦笑し、最初は自分たちの求めているホストクラブではないと断り、他所を当たったが、他所では二人一緒に働くわけにはいかない、相棒の方が齢嵩なので馴れるには時間がかかるだろうから、まだ若い彼一人を採用したいと言い出す。それで彼がホストとして働きに出て、相棒がブラブラしている時期があり、そのうちどこでどう見つけたのか相棒が金持ちの客を沢山知っているという女を連れて来た。女は男二人のゴミが散乱した部屋に来るなり「豚小屋みたいじゃん」と言い、足でゴミを蹴散らして部屋の真中にあぐらをかき、「話、全部、この人、フェラしながら聴いたからさァ」と彼に言い、唇の端に舌でガムを出し、マニキュアの指でつかんで眺め、汚い物をよ

く噛んでおれたというように顔をしかめて灰皿に捨てる。

「色々言ったけど、わたし、ずっと、この人、時間長くしようと思って、色々言ってたんだ、と思って、途中聴いてなかったけど、最後は何となく分かった。聴いてない時フェラに一生懸命で、最後の方、あご、くたびれてダラダラしたんだ、そしたら、逆に興奮してイッちゃったの。厭だよ、ナマシャクは、まだ喉に詰まってる気するもん」

相棒はヘラヘラ笑っている。彼は相棒の尻を蹴った。「何じゃ」相棒が言うので彼が「何じゃとは何じゃ。人が汚いオメコに鼻突っ込んで舐めさせられて稼いだ金を、おまえがこの女の口に放り込んどるのか」と怒鳴ると、女は「いいじゃん。それでわたしと知りあいになれたんだからァ」と言い、自分がどれほど金持ちで社会的地位のある人間を知っているか、と言い出した。大会社の社長、重役に政治家、野球選手に俳優、その夫人、裏に廻れば色に狂っていないものはないほど、狂乱痴態を毎晩東京のどこかで繰り広げている。女が次々に挙げる名前の何人もが、彼の相棒も新聞や週刊誌で見聞した覚えがあったので、どうして知っているのか？　と訊くと、「言ってみれば、わたしら闇の軍団じゃない。ホストとか風俗とか、オカマとか、昼間じゃなく夜の商売じゃない」と言い、急に関心が湧いたように、「ねェ、一緒にこれから組むんだから、見せて」と彼に裸になってみろと言い出す。彼が女の唐突な要求に戸惑うと「何言ってるの。わたしプロよ。ファッションやソープへ行ったら裸になるでしょう。裸になって勃たしてよ。見せてよ。そうしなきゃ勃たないって言うなら、プロのわたしがお金取らないで舐めてあげるからさ」

彼は女の言うまま裸になり、パンティをはいたままでよいからスカートをめくり上げ、見せてくれと頼み、性器を勃たせた。彼がサイボーグになったのはその時からだった。女が貯えていた金で二人、別々に新しいマンションを借り、彼は女が言う〈豚〉たちの為に週三回、三時間ずつジムに通って体

を鍛え改造する。
イーブという呼び名が女から与えられた。相棒の方はター。いつまでもトレーラーの相棒時代の色が取れないのでコールタールのター。その時からイーブは何もつとめて考えないようにした。女の元に集まるホストの用を、一回コールが三回切れる、という合図で部屋で受け、相手が美人であろうと不美人であろうと、若かろうと年寄りであろうと、たとえそれが男であろうと相手に満足を与えるだけの為に着飾り、脱ぐ時の男の色気まで計算して一物が飛び出しかねないスキャンティをはき、オーデコロンをはたいて約束の場所に出かける。
相棒だったターは三回コールが合図だった。相棒がターという名前になってから、彼が女の与えたイーブという名に変わったほどの変化はなく、ターはトレーラー時代と同様、競輪にうつつを抜かし、ファッションに通って好みの女と遊び、そのうち惚れた女が出来たので金を貸せと無心に来るようになった。
「自分で稼げばいいじゃないか」
イーブは綺麗な訛のない標準語をことさらしゃべった。
「どうせ趣味の悪いチンケな女に惚れたんだろ。その女にいいとこ見せたいって言うなら、白豚でも黒豚でも抱いて金巻き上げて貢げばいいじゃないか。それともその女、ソープにでも出すか」
相棒だったターはイーブの変わりようを信じられないというように見て、ことさら同じ故郷の同じ路地から東京に出て来て、男相手のホストクラブのマスターから恋人同士だと疑われた仲だと強調するように「俺には合わん」と訛を使う。
「おまえと違って俺は齢取っとるし、人の言うなりにようならん」
イーブは舌打ちし、これっきりだと念をおし、金を貸した。絹のジャケットのポケットに入れてい

た黄金のネックレスをつける。ポケットにはダンヒルのライターが入っている。女が指にはさんだ煙草に火を点けるのはホストの役目だったが、黄金のネックレスとダンヒルのライターの贈り主は違っていた。自分の贈り物でないダンヒルのライターで火を点けられた女は、イーブの背後にもうひとりの女がいる事をめざとく感じ、イーブがその女と性交する姿まで想像して嫉妬し、金で男の歓心を買えるのならと、札びらを切り、物を贈る。

人前で札びらを切られようと物を贈られようとサイボーグのイーブは何も感じなかった。一年前と比べてただ肉体の鍛練だけに励み、ヘラクレスの彫像のように変わったイーブは、女の言うままホテルの部屋に向かい、部屋に入るや否や、いままでの女の人生で一度も味わった事のないと分かる場面を演じて見せる。若い美しい男が女への情欲に駆られてドアが閉まった途端、激しく抱き、キスをし、女への情欲にこらえ切れなくなり、昏い切なげな目で女を見ながら服を脱ぐ。女はスキャンティからはみ出しかかった勃起した性器を見るだろうか？　むしろ女が贈った黄金のネックレスが裸になった美しい一角獣の首に、その獣の角がどのように凶々しく大きかろうと、胸板が巌のように厚かろうと、馴致された証の首輪のように光っているのを見る。

先に裸になるのはホストの務めだった。裸になればなるたけ早く性器を女の手に握らせるのも、女を舞い上がらせるコツの一つだった。ジムナジウムを出て、時計を見て時間が経ったのを知り、待ち合わせの場所のホテルにタクシーで向かった。ホテルの受付で、言われたとおり梶原という名を名乗り、宿泊カードに住所、電話番号を記入し、差し出すと、クラークが一瞬、男の高級売春のホストだと見破って名前も住所も電話番号もでたらめだと分かっていると笑った気がしたので、イーブはウィンクした。そのウィンクをどう勘違いしたのかクラークはうろたえ危ない物を見るように目をそらして鍵を差し出す。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

約束の時間にまだ二十分あったが、イーブは部屋に上がり、漠然とした不安のままバスルームの鏡に顔を映し、クラークにしたようにウィンクしてみた。悪いウィンクではなかった。何度もウィンクしながら、クラーク・ゲイブルかハンフリー・ボガートと比べても遜色はないと独り悦に入り、煙草を小道具にしてしばらくハンフリー・ボガートの真似をしていると、客の女がバスルームの戸口にぬうっと姿を見せる。

「何してるのォ」女が間のびした声を出した。イーブは口の端に咥えていた煙草を落とし女の現われように失望しそれでも気を取り直し、ハリウッド映画の一シーンのように鏡の中の〈白豚〉に向かってウィンクを送った。「どうしたのォ、ドア開けっぱなしになってるし」〈白豚〉は微かに訛のついたハリウッド映画らしくない味気ないセリフを言う。

「さっきの下のレセプションで、梶原と名乗ったら笑ったので、ジゴロだと見破られたと思ってウィンクしたらうつむいてやがんの」

「どうせ、あんた、ここ使って商売した事あるんでしょ。山田とか佐藤とかって名前使って」

「違いますよ。ここ、初めてですよ」

〈白豚〉はバスルームの中に入り、イーブの後ろに立つ。「あら、そう」〈白豚〉はハイヒールをはいているが、イーブの胸くらいまでしか背がない。後ろからイーブの体に腕をまきつけ、かくれんぼするように右脇から顔を出し、鏡に顔を映し、鏡の中のイーブを見て、「それなら、さァ、ホモよ。わたし、チョン子に問いつめたから知ってんだけど、あんた、男も相手した事あるんでしょ。女だって男だって放っとかないわよねェ」

イーブは〈白豚〉の言葉に腹が立った。〈白豚〉は鏡に映ったイーブの眼が、以前と同じように怒りではなく情欲で昏くなったと思ったように、鏡の中のイーブを見つめ、「好きよ、メチャメチャに

して」とハリウッド女優のような歯の浮くような科白(せりふ)を言う。もしハリウッド女優なら、たとえばドアが開けっぱなしになっているのでジゴロとの情事を人にさとられる、と叱り、警告するのなら、部屋のチャイムを激しく鳴らし、そんな不用心では客として遊べない、これでおしまいだからホテル中に知れ渡っても平気だと、イーブをなじる。なじられて取り繕うも取り繕わないも、ジゴロのポケットの中の金の額で決まる。そう思って〈白豚〉の腕を振り払おうか、どうしようかと昏い眼をしたまま躊躇していると、〈白豚〉が「ワイン飲もうかァ」と言う。「ここのホテルのフランス料理に行ってもいいし、部屋あるんだから町まで行って食事して上等なワイン飲んでもいい」

〈白豚〉はどっちがよいか、と訊いた。イーブは単純に町へ出かければ、受付で何度か鍵の受け渡しをやらなければならないのでホテルの中でワインを飲むと答えた。イーブを危ない物を見るように見たクラークに会いたくなかったし、たとえ顔をあわせ、互いのこだわりをなくすかのようにイーブがウィンクし直し、クラークがやっぱりジゴロだったと笑を返す事になったとしても、ジゴロの自分が体を売る相手がチビでブスで年寄りの〈白豚〉だと見られるのが、今の最大の屈辱のような気がした。

三十七階の見晴らしのよいレストランに入り〈白豚〉はワインリストを眺め、ボーイとあれこれ話した。手持ちぶさたのイーブはする事がなく〈白豚〉をまじまじと見た。〈白豚〉の耳に真珠のイヤリングが揺れているのを初めて知って〈白豚〉がジゴロとの情事に備えて着飾っているのを知り、おそらく体中どころか股の間にまで香水を振りかけて来たのだろうと思い、女のいじらしさが浮き上がっていると急に優しい気持ちであふれ、〈白豚〉がワインリストをボーイに渡すなりテーブル越しに手を差しのべ、〈白豚〉の手を握った。〈白豚〉はキム・ノヴァクかビビアン・リーか今風のブルック・シールズになったように驚いてイーブを見つめ「つらかったァ」と言い出す。

「どうして？」イーブはホストの鉄則どおり、言葉少なに相手の気をそらさないように訊いた。

「忘れられなくなりそう、と言ったけど、そう」〈白豚〉は科白のように言う。
「チョン子と顔見知りだから一回ぐらいはいいって誘いに乗ったんだけど、あれからずっとあなたの事、考えていた」
イーブは黙ったまま〈白豚〉を見つめた。イーブはサイボーグだった。何も考えない。元々、考える事は大して多くなかったので、どう見てもハリウッド女優の吐くような科白の似合いそうのない、貧相なチビでブスの年寄りの〈白豚〉が、伯爵夫人のような、金満家の有閑マダムの言いそうな言葉を親身になって受けている、という事など、たやすい。何も考えず、何も感じないまま、サイボーグとして女の前に坐って相手を見つめると、相手はイーブの腹が減ったなと目を細めただけで恋に身を焼き想いが募ったのは自分もそうだと言っているかと思ってくれる。
顔のひげそり跡がかみそり負けし、かゆくなったとしよう。指でかけば炎症を起こし赤くなると分かっているのでかくのをこらえ、しかしかゆさに思わず頬を動かしてしまうと、相手はイーブがサイボーグではなく、自分と同じ心を持った人間で自分の話を聴いて嘲笑したと取り、失意に陥るか怒るかする。
ジゴロと言ったとしてもホストと言い直しても、相手とは金でしかつながっていない。相手も当方も分かっている事だが、相手は急に小便臭い日常からハラハラドキドキする劇映画の中に入り込んだように、目の前にいる美青年との会話は国際電話の通話料金より高い金がかかっていると知りながら、子供が現実の人形に語りかけるように夢見心地で苦しい胸のうちを話すのだった。
〈白豚〉がチョン子と呼ぶ連絡係のファッション・バーラーで働く女に、イーブの方は〈白豚〉の身元を何も知らされていなかった。だいたいは身元の確かな本当の大金持ちだが、中には女のチョン子さえ長い事だまされ続けたくわせ者もいる。夫はしがない平凡なサラリーマンなのに何に火がついた

のか、サラ金を借りまくり、カードで物を買いまくってホストに貢いでいた客もいる。人の預金を操作して金をつくり、遊び廻った女もいる。チョン子は言うのだった。そりゃそうだよ。セックスってあっち向いたってこっち向いたってワーワやってるじゃん。パートに出たり何だかんだとしてさ、小金あったらさ、ちょっとは遊びたくなるじゃない。ちょっと着飾って映画に行ってさ。次の時はスナックへ行ってさ。ひょこっとホストの世界にまぎれ込む。美しい男らがいっぱいいる。それにくたびれたお父ちゃんのじゃなくて、その為だけに磨いてる男がいる。もう駄目ね。もう戻れないね。だってデパートで売ってる物なんて、それで女の夢、見ようと思っても手間暇かかるもの。こつこつこつこつ。骨がきしんじゃう。ところがホストの世界ってシンデレラじゃん。中に入った途端、シンデレラか白雪姫になったみたいに美しい男にかしずかれて、そのうち寝て、天に舞い上がる心地して、ああ、人生こんな素晴らしい世界味わっている人いるんだと思う。もう歯止め効かないよ。

〈白豚〉は運ばれて来たワインを味見し、ボーイにうなずき、イーブの顔を悲しげに見る。ボーイが去ってから、「今度、あなたがしてね」とささやき、イーブが何の事か分からず見つめ続けると「ワイン」と目を伏せ、言い難い事を言ってしまったと話を変えるように、「こんな店一軒、持っていた事あるのね」と言い出す。

「ああ、そうなんですか」イーブはホストの鉄則どおり、毒にも薬にもならない相槌をうつ。〈白豚〉はホストのイーブに、見栄を張ってつくり話をしていると誤解されたと思ったように、「ほんとよォ」と言い、イーブには格別聴きたい事ではないのに、事業をしていた夫と別居したのでしばらく自分が経営していた、と身元を明かしかかった。

話している最中に料理が運ばれる。〈白豚〉が、何の料理を頼んだのか分からなかった。フォークとナイフをどう使いどう置けばよいのか見当がつかず〈白豚〉の真似をすると、身元を話し続けてい

た〈白豚〉は笑い出し、「まだ子供みたいなところあるのねェ。可愛いのねェ」と言い、食べるのを止め、フォークとナイフをそろえ「こうすれば終了という合図」と言い、一瞬、〈白豚〉からシンデレラの気持ちを味わっているのは〈白豚〉の自分ではなくイーブという源氏名の彼の方だと言われたと顔がほてったイーブに、「飲みましょうよ」とグラスを持ちあげる。渋々彼はグラスを持ちあげ乾杯した。グラスの音が立って、彼からまたサイボーグのイーブに戻ったように、〈白豚〉を見つめ、相棒だったターがチョン子に何を言ったのか、チョン子が〈白豚〉に何を言ったのか、サイボーグの今のイーブには関知しない事だと目を微かにしかめる。

ジゴロ、ホストのイーブは力を抜き、しかめた目が相手に何を訴えるか、分かっている。相手にはサイボーグのイーブが目のあたりの筋力をかすかに緩めただけのものが、すぐにでもベッドへ行こうと若い猛った一角獣が誘っているように映る。〈白豚〉はワインの酔いで羞恥心が薄らいだのか二度目だったので不安がなくなったのか部屋に入るなりイーブにしなだれかかり、服を脱がして欲しいとあえいだ。イーブが灯の煌々とついた部屋の中では羞かしいだろと灯に手をのばして落としかかると見ていて欲しいと言った。

〈白豚〉の裸の何を見て情欲に猛るのではなく、サイボーグの一角獣は二人きりの部屋に入ると、後頭部にか前頭葉にか埋め込まれた情欲のセンサーが感応し、刺激が流れ、勃起する。〈白豚〉の着ているブラウスのボタンをはずし、そのままシュミーズの下の肉に埋まるほどきついブラジャーのホックをさぐり当ててはずし、さらにサイボーグの指にも情欲のセンサーが埋め込まれているというように、たるんだ肉をたどり、スカートにおりる。左腕で〈白豚〉の体ごと抱かえ、スカートのホックをはずし、〈白豚〉を膝の上に乗せたまま、はずした服を脱がしにかかる。〈白豚〉はイーブのサイボーグの指が夢想の中の恋男のもののように、「ああ好きよ」とハリウッド女優のような科白を吐き、ふ

と、シュミーズの下にはいていた小さめの、きつく肉に食い込んだガーターに指が困惑していると知ると、身をゆすり起き上がって自分で脱ぎにかかる。

サイボーグは〈白豚〉のその仕種で鼻白むわけではなかった。鼻白むというなら最初からだった。〈白豚〉は娘のはくようなフリルのついたパンティをはいている。パンティ一枚になってから〈白豚〉は自分一人あられもない裸身をさらしているのに羞恥を覚えたように体をよじり、イーブの体に身をのしかけ「取って」とネクタイの結び目に手を掛ける。淡い水色のストライプのネクタイには真珠のタイピンがしてある。

イーブは〈白豚〉の手を押え、「待ってな」と優しく言葉を掛け、立ちあがって〈白豚〉の情欲に燃える目に一角獣のサイボーグがどう映っているのか計算しながら、情欲のセンサーのついた指で小さなタイピンをはずし、鏡の前の台に置き、次にネクタイをはずす。ネクタイをはずし襟のボタンを広げ、中の黄金のネックレスをさりげなく〈白豚〉に見せた。〈白豚〉は案の定「ああ」と声を出し、自分が贈った物が一角獣の首に首輪のように飾られているのに満足し、二度目とは言え、見も知らぬ男と一緒に狭いホテルの一室にいる不安が消えたように露骨に夢見心地の顔をする。

絹のジャケットもズボンも型が崩れないように椅子の背に掛けた。シャツを脱ぎ、スキャンティ一枚になって、イーブは〈白豚〉に羞かしげな笑を浮かべた。〈白豚〉はそのサイボーグの笑に誘われたように、ふらふらと垂れた乳房を片手でかくしながらベッドから降りてイーブのそばに来る。イーブは〈白豚〉が何をしたいのか察した。

〈白豚〉はイーブの前に来て坐り込み、腰を抱え、勃起して小さなスキャンティから頭が出たサイボーグの性器に頬ずりする。性器に頬ずりするのは一向にかまわないが、スキャンティに頬ずりすれば、〈白豚〉のファンデイションやら微かに塗った頬紅がつくし、キスをすればどう見ても安物としか思

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook